

## みんな違ってオンリーワン

住 職

山口県に金子みすずという詩人がいました。その人の詩に「私と小鳥と鈴と」というのがあります。

私が両手をひろげても

お空はちつとも飛べないが

飛べる小鳥は私のように

地べたを速くは走れない

私が身体をゆすつても

きれいな音はでないけど

あの鳴る鈴は私のように

たくさんな唄はしらないよ

鈴と、小鳥と、それから私

みんなちがって、みんないい

皆と同じでないと時代遅れになると思う。皆がしているようにしないと「なんとなく」落ち着かない。それで同じような考えで、同じように行動する。

「人と同じように・人並みに」を目安にして生活しているのが我ら人間の習性です。それもいたしかたないことかもしれない。しかし、それで良いとも言いきれないところに人生の難しさがあるようにも思われます。

我らは常に他と比較して、安心あるいは不安を感じています。これは、他と比べることによって、切磋琢磨し、お互いが向上



(月田幹雄さんの作品)

してゆく面があると同時に、挫折の可能性も含んでいるのがこの世の現実です。挫折は悲痛な悲しみに変わりますと、「こんなことなら生きていてもしかたがない」などと思ひ込み、自暴自棄になることもあります。

世界には何十億の人がいますが「私」はこの世に一人しかいません。最初から他の人とは同じではないのです。「みんなちがって、みんないい」のです。そのことを知らせてくださるのが阿弥陀さまです。このことに気付かせていただく人生を歩ませてもらいましょう。

## 門信徒会発足・十周年に！

長井 輝子

寺報も平成十四年から発行されるようになり、創刊号はまだ名称がなく「門信徒会だより」として第一号が七月に刊行されました。

十年ひと昔といいますが、一番の思い出は、親鸞聖人七百五十回大遠忌法要に併せての信行寺震災復興十周年記念行事が修行されたことではないでしょうか。

又、米田住職のお孫様の空城さんと光輪さんのご成長ぶりです。それは月々の法話会や法要の際の勤行の声にもあらわれておりますし、伸び盛りですので法衣の身の丈がすぐに合わなくなるようです。まことに頼もしい限りでございます。

次に仏教では不変と常住はないものとされていますが、この会の初代会長をつとめて下さいました谷川俊雄様が、一昨年九月、八十九歳でお浄土へ旅立たれました。発足当時、私も副会長の一人としてご一緒にご縁を頂いた中で、まことに悲しく淋しい思い出となっております。

いろいろの思い出と共に十周年を機に信行寺門信徒として心も新たにお念仏を喜ばせて頂きたいと念じております。

合掌

信行寺門信徒会は、平成十四年四月に発足し早や十周年を迎えようとしています。この会が現在三百数十名の会員に増加したことは、皆様方の協力のお蔭だと思えます。ご承知の事と存じますが、門信徒会は浄土真宗の門徒であることの意義を高め、将来にわたって、お念仏のご法義相続をより一層すすめることを目指しています。

私は発足当時、谷川俊雄会長の指導のもと、副会長として、福岡さん、長井さん、松井さんと共に、微力ながら活動させてもらいました。信行寺は阪神大震災前、一週間に一度は法座活動をするなど、神戸では類のない活動をされていたと聞いております。それを支えていたのが、婦人会・壮年会だったようです。この素晴らしい活動を引き継ぐために出来たのが門信徒会です。

門信徒会は、年間次の活動をしています。

- 一、 寺報「ほのぼの」の発行 (年三回発行)
- 二、 研修旅行の実施 (年一回実施)

三、 夏期特別法座 (年一回八月実施)

四、 念仏奉仕団への参加 (年一回奉仕活動)

それぞれの活動を通じ、門信徒会の目的達成に努めているところです。

私は「ほのぼの」の発行を一昨年の三月まで担当してきました。この間皆様のご協力により現在二十九号まで発行できたことを嬉しく思っています。今後も皆様のご協力を得ながらホットな記事をお届けするよう協力したいと思えます。寺報「ほのぼの」以外の諸行事もさらに発展することを期待します。お寺とはご縁のなかつた私が、門信徒会加入のお蔭でみ仏と接することができ、生きる喜びを与えられたことを感謝し、今後とも門信徒会発展に協力したいと思えます。



月田幹雄さんの作品

# 「お茶と人生」

副 住 職

私は様々なお茶を飲むのが好きなのですが、最近中国茶をよく飲みます。先日、あるお客様に私のお気に入りのお茶を出したところ、「おいしい烏龍茶ですね。わたしも大好きなんです」と言って喜んでくださいました。その方は台湾にしばしば行かれるらしく、面白い話をしてくださいました。台湾では、みんなで集まってお茶をゆつくりと時間をかけて飲む習慣がある。小さな湯のみに急須から何度もお茶を注ぐ。はじめのお茶は色や香りも濃い。2回目、3回目と、急須にお湯を注いでいくうちに色や香りは薄くなっていくのだが、マイルドな深い味わいにかわっていく。その移ろいをゆつくりゆつくり楽しむのだそうです。このお茶の飲み方を台湾で体験してから、中国茶のファンになったということですよ。

そして台湾の人は「それはまさに、人生そのものだ」と言うのです。

若いときには、若さの勢いというものがあります。年を重ねるごとに、その勢いはなくなり、しだいに老いを経験していくのですが、そのなかには若いときには味わえなかった深い味わいがあるのだと。

体力や記憶力などは衰えてしまします。若いときに出来ていたことが出来なくなるのが老いであり、釈尊も「生老病死の四苦」の一つにあげています。しかし、若いことが良いことで、年をとることが悪いという考え方はなく、それぞれの味を楽しむという姿勢が素晴らしいと思います。仏法に縁のある人にとっては、いろいろな経験をおしえて、ますます仏縁を深めていくことができるのなら、老いもまたよしと思えるような生き方になるのではないのでしょうか。

この話を聞かせてもらってからは、何回もお湯を注いで色も香りもほとんどしなくなつたお茶のなかにも、味わいを感じるようにゆつくりとお茶を楽しむようにしています。



三峰山の霧水

## 語り継がれる聖人のご遺徳

森本 勝

平成二十三年は大変な年でした。東北の地震と津波、そしてそれによって起こった原発の放射能漏れ。大雨による洪水とで、田畑や家を失った人。被災者にとってはまさに地獄のような一年でした。このような時に、親鸞聖人七百五十回忌の大遠忌を迎えましたことは、不思議なご縁だと思われまます。

先日の報恩講には、ご講師のお二人が、親鸞聖人のご遺徳について熱っぽく語られました。「枕石寺」、「川越の名号」の説話、二十一世紀の現代人には理解し難いところもありますが、物語として言い伝えられるほどに聖人の徳の高さが偲ばれます。

米田住職は『親鸞聖人御絵伝』の第八段「入西観察」の段を話され、聖人が阿弥陀様の生まれ変わりであることを説かれました。

聖人の御弟子、入西房に請われて聖人の御姿を描くことになった絵師が、聖人の顔を見て「去る夜にみた霊夢

に現れた聖僧の顔にそっくりで、このお方は誰ですかと付き添いの僧に問うたところ「善光寺の本願の御房である」と言われた、と夢のいきさつを語るのです。

『御伝鈔』には聖人が阿弥陀如来の来現であるから、教行信証などは弥陀の直説であると説かれております。また法然上人が勢至菩薩の化身であり、聖人が観音菩薩の化身であるという、聖人の妻である恵信尼公の見られた夢のことなども話されました。

天岸先生は「御絵伝」下巻の第三段「弁円濟度」のところを説かれました。山伏の弁円が改心して聖人の弟子となるお話です。

その後日談で、弁円の往生に際して「めでたいことである」とか「喜ばしいことである」と仰せられた聖人のお志を通して真宗独特の信仰を話されました。

私達が真宗の教えが難しいとか、他力をどう会釈していくかに際して、世間の常識というものに突き当たって迷うことがあります。私達はその世間の常識を打ち破るのではなく、その常識を超えた先に真実があることを教えられます。今まで教えを受けてきた善知識の数々のお言葉を心のうちに反芻して、更なる宗祖の深遠な浄土真宗の御教えを味あわせていただきたいものです。

# 浜尾 千代子・「押し花」作品展

(平成二十三年十二月より一カ月展示)

この度、信行寺坊守様から「押し花の作品を沢山お持ちなら、お寺で展示されたらいかが？」とお誘いで開催させて頂くことになりました。今まで、押入れの中で

眠っていました作品も、やっと日の目を見まして大喜びだったことでしょう。

たくさんの方に見て頂き、又お世話下さいました坊守様、若坊守様、谷藤様、そしてご覧下さいました大勢の方々に、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

感謝合掌



パンジー



春の野原



窓を開ければ

## 「仏さまの旗」

仏さまのはた(仏旗)は、六金色旗ともいいます。仏教の旗しるしです。

青(緑)・黄・赤・白・紫の六色です。お釈迦さまの国インドでは六金色として伝えられていました。

『涅槃経』というお経に「二月十五日、お釈迦さまが入滅される時、お顔からいろいろの美しい光を放ち、その青・黄・赤・白・はり・めのう等の光は、十方を照らし、光を受けたものは罪や苦悩・煩惱の一切を消滅する」とあります。

創始者は仏教信者でありましたアメリカのひとです。明治二十二年ごろより仏教各宗派で用いるようになりました。

当信行寺では、法要のあるときに揚げていましたが、阪神大震災でお寺が灰燼に帰し、何もないうとき、富山の仏教壮年会の方々が焼け跡に「ここはお寺です」という印に仏旗を掲げてくださいました。その思いを受け継いで、それ以来十七年、三百六十五日、

毎日掲げ続けております。

仏旗を掲げることは、

「ここにお寺がありません」という目印になりますが、同時に、広く十方世界の生きとし生けるものの闇を照らし、救い取るという摂取不捨の仏さまのお慈悲を表しています。

## 新小学一年生 おめでとう

門信徒会十周年記念の総会の日

(四月二十八日)に、今年小学校に入学される子供さんをお祝いしたいと思います。つきましてはご家族の中で新一年生になる人の名前をお気軽にお寺まで申し出て下さるようお願いいたします。

(心ばかりのお祝い品を贈りたいと思います)



# 信行寺行事予定とご案内

かんぶつえ  
灌仏会・写経納経法要

四月八日（日）  
午後二時より

第十一回 門信徒会総会

四月二十八日（土）  
午後二時より

門信徒会員の皆さま  
門信徒会十周年記念の総会です。  
是非お越し下さい。

## 永代経法要

五月二十六日（土）  
二十七日（日）

両日とも二時から四時です。  
皆さま、どうぞお参りください。

「報恩講にお参りしての一句」

釜江 喜代子

- ・三代の揃い勤行 報恩講
- ・復興の御堂に集い 報恩講
- ・恙なく 聴聞叶う 報恩講

## ◎編集後記

東日本大震災から丸一年経ちました。未だに復興が進まず、はがゆい思いがつのります。

昨年の十一月、被災地、福島県相馬市の小学校にブータンのワンチュク国王が訪れました。その時「みなさんの中に人格という竜がいます。年を取って経験を積むほど竜は大きく強くなります」と話されました。

被災地の子供たちが、天に向かって強く大きく育ち、笑顔で暮らせる日が一日も早く訪れますように。

多田 清子